

今度は途中に今泉駅があり、ここから旧国鉄時代に走っていた長井線があるが現在は山形鉄道と言う名前に変わった。

当時の鉄道ファンから距離が、「短くても長い長井線」と親しまれていた？線でもある。

しかし、“長い物には巻かれる”と言う諺の通り、国と言う長い物に巻かれてしまったのである。今は第三セクター線になり、赤湯駅 - 荒砥駅間の30.5 Km間を走る「フラワー長井線」と言う愛称線で現在も親しまれている。

フラワー線と言うからには沿線には美しい花が咲き乱れている線でもあり、菖蒲が有名である。駅の近くにある北の酒場には“髪の長い女が似合う”らしく、フラワー線にも長い花の名前も似合っていたのは、長井秀和でも“間違いない！”言っていた。

列車は、全てが赤湯駅、荒砥駅間を往復しているのが良いと思えた。

今泉駅は、あの宮脇俊三氏が父子で終戦詔詞を聞いた駅として有名である。小生にとっても、本格的なローカル線を乗り回した最初の懐かしい米坂線でもあった。人生には上り坂、下り坂、そして真坂の坂があるが、小生にとってはこの「米坂」も加えたい。そして、人生と言う旅の始まりの原点がこの米坂線であった。

今泉駅を出ると、まもなくあやめ公園駅があり、“いずれ菖蒲か杜若”と言われているように、美しい菖蒲「あやめ」が咲き誇っていたことを思い出すが、杜若「かきつばた」は思い出さなかった。思い出したのは、「飲めや あやめの」で

「のめやあやめの」と言う回文である。

もう1つ思い出したのは、この駅は今年の平成14年6月にあやめが咲いていた頃に誕生した駅であった。

途中で白兔「しろうさぎ」駅があったが、この線には特急列車は走っていないのであった。因美線、智頭急行を走っていた「特急はくと」を思い出したからだ。この線にも特急列車を走らせて欲しいと耳を長くして待っている人はいないと思った。耳を長くして待っているのは、白ウサギだけかも知れなかった。それは、“株を守りてウサギを待つ”であった。

そして、暗い車窓から見える光景は、待ちぼうけの風景であった。

待ちぼうけ待ちぼうけ ある日せつせと野良かせぎ そこへ兎が飛んで出て…
歌を歌っている場合ではなく、暗くなった車窓を尻目に“脱兎の如く”列車は走った。
荒砥駅を折り返し、今泉駅を乗り越す途中に梨郷「りんごう」駅の標示が見えた。
一瞬、「梨の故郷」かと思うが乗客はリンゴーと言い下車した。
外は暗く梨もリンゴも見えないが、とにかくこの駅は「りんごう」と読むのだけは分った。
そして、「りんご村から」を歌うのであった。

覚えているかい故郷の村を… を歌うのであった。